

BOOK
REVIEW

流用

見立ての面白さ

『おすしが ふくを かいにきた』 20a 新ゴM (以下同)

田中 達也 作

15a 新ゴR (以下同)

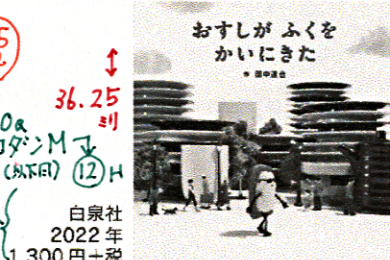
手術室に来る患者は極限状態にある。平静を装っていても心臓バクバクなことはあり、モニターを装着して心拍数を確認するまでもなく、顔でわかる。ある日の小学生の僕ちゃんは、泣くのこらえながら、一緒に手術室に入って来た親に「今度またスシロー行くやんな、いつ行く？絶対やで」と必死に訴えていた。この手術をがんばったご褒美は、大好きな回転寿司らしい。微笑ましく感じながら「お寿司は何が好きなん？おいしいのぎょーさん何皿も食べる夢、今から見れるで」と言い聞かせながら眠ってもらった。

本書は、そんな子どもが大好きな握り寿司が歩いて衣料品店に来て、ハンガーに吊り下げられたマグロを着ようかエビを試そうかと迷う情景の絵本である。ミニチュアを作り込んで振っているのが、写真集ともいえる。この製作技術もすごいが、発想が面白い。子ども向けのようで、大人も楽しめる。

作者は、何でもない日用品を拡大撮影することで何か別の物に見立てて、にやりとさせる風景を作り出す天才である。本書では、おすしに続いて、アイス、はこ、えんぴつ、シュウマイ、ソーセージ、いちごが登場する。それぞれ数ページずつの物語で、短編集のような体裁である。どれも見立て方が面白いので「なるほど、そうきたか」とにんまりさせられる。ページをめくる手が止まらない。擬人化されたおすしら主人公たちはもちろんだが、背景がまた愉快である。ちょっとしたところに「なるほど」とうならせる物が置かれているので、隅まで見渡してほしい。

32a 見成ゴ MB 31
34a H (以下同)

6a リケイ・スミ70% 文庫白スミ (以下同)



神戸空港の屋上展望デッキ横には、この作者によるミニチュア作品の実物がたくさん展示されている。この発着便数は少なく、乗り入れている航空会社も限られているので、航空機マニアにはつまらないかもしれない。しかし、この作品群を見るためだけに行く価値がある。無料である。本書で「お」と感じたなら、ぜひ訪れてほしい。ここに並ぶ作品は一つの情景だけで完成しており、いわばコマ漫画である。飛行機に関連した作品だけでなく、ありとあらゆる題材があり、どれもよく考えられていて、飽きない。二次元の絵本と違って立体なので、あちらからこちらから見られるのもうれしい。そして、題目の命名も秀逸である。ただし、日本語の駄洒落が効いているので、外国出身だと題目の面白さは伝わりにくいだろう。例えば、数字の1をイチと読ませたりワンと読ませたりする日本語の自由さが身につけていないと、難しい。

「見立て」とは、本来は違う物を持ってきて「ほら、あれに見えるでしょ」と、何か別の物に無理やり見ようとすることを言う。日本では昔から粋な遊びとして、

いろんな場面で親しまれてきた。庭園では、水もないのに砂利の罫目を水に見立て、滝の向こうの大きな岩を蓬莱山、終長の石を鶴、平たい石を亀と見立てる。和菓子では、季節の情景を極限まで単純化して見立て、銘を付ける。落語家の扇子や手拭いは、ありとあらゆる日用品に見立てられて物語に彩りを添える。生卵を割り落とした月見うどんは、熱々のつゆで薄ぼんやりと白くなった卵白が、月を隠そうとたびく雲に見える。海外にはこんな「見立て」の文化はないらしい。しかし本書は、この文化的背景がなくとも楽しめるだろう。庭や和菓子を理解するには古典などいくらかの教養を要することがあるのだが、本書の見立ては一目瞭然誰にでもわかる。神戸空港の作品も、大勢の外国人が見入っていた。言語不要の国境を越えた面白さがある。

本書を開く際に、一つ注意点がある。お腹が空いているときや、夕飯の予定がないときに開くと、おすしの頭になってしまうことである。特に子どもには「今見せていいか」を見極めてからにしないと、回転寿司の大合唱が始まってしまう。後にアイス、シュウマイ、ソーセージ、いちごも続いているのだが、おすしの力は絶大である。作者も、このおすしの人気ぶりをよく理解しているからこそ、本書を生み出したに違いない。続編『おすしが あるひ たびにでた』もおすしが主人公なのは、当然だろう。こちらは長編小説に仕上がっている。併せて楽しんでいただきたい。

冒頭の僕ちゃんが覚めてすぐに「回転寿司の夢見た？」と尋ねたが「見いひんかった」らしい。書評子は眠らせることはできるが、夢を操る技術は持ち合わせていない。

本文 12a
レタギ/明朝 W2
19a H
18w 詰
19a H (以下同)7キ
水谷 光
(市立民家病院 麻酔科・中央材料室)
12a 見成ゴ MB 31
2H
10a 新ゴL
12a 新ゴLいい編集者がいて、
いい作家がいる、逆もしかり

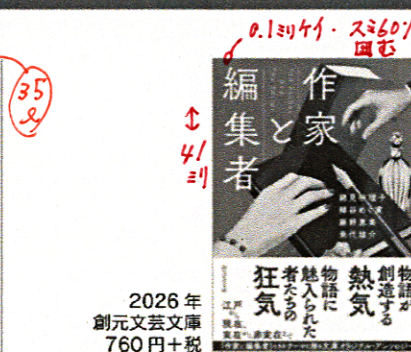
『作家と編集者』

錦見 映理子ほか 著

2017年12月号の本コラムで、A・スコット・バーグ著『名編集者パーキンズ』(2015年)を取り上げたことがある。編集者は誤字・脱字チェックや悪文修正などの校正がメインの地味な作業に当たる職業と思っていたが、パーキンズを知って編集者のイメージは大きく変わった。フィッツジェラルドやトマス・ウルフの図抜けた才能をいち早く発見し、勝手気ままな青年ヘミングウェイを巧みにコントロールし、彼らを超一流の作家に育て上げていく。叱咤激励し、作家から恨みを買うことを意にも介さず、少しでも優れたものにするためには骨身を惜しまない。ウルフの代表作『天使と故郷を見よ』(1929年)の原稿をもらったパーキンズは、生原稿から6万6000語ほどを削ったそう。さらにウルフの部屋で一緒に推敲した。気にかかる箇所を指摘し、それを聞いてウルフが手直しに当たる。まるで編集者が作家の生殺与奪を握っているかと思わせるほどだ。

この読書体験があったせいだろう。本書は刊行直後に入手した。文庫版であるが、初の書籍化。「紙魚の手帖」vol.22(2025年)で特集「作家と編集者」として掲載された4人の作家の短編4本を収録している。

最初の作は、錦見映理子の『邪悪な香り』。ベテラン編集者が直感的に才能を読み取ったデビュー前の作家を一人前に育て上げようとして、偏執狂と言ってもいいくらいに心血を注ぐ物語である。さて、そんな彼を待ち受けているのは？ 憑依物で、人気シリーズ番組『世にも奇



妙な物語」を連想させる。スリリングなストーリーだが、その展開や結末がある程度予測されるのがちょっと物足りない。

個人的に好きなのは二作目、蟬谷めぐ実の『餅屋の言うこと』。役者と評者という設定だが、評者が編集者のごとく役者の活力のもとになっていることに気づく話である。終始緊張感に富む文体で、小気味よいテンポで進む。歌舞伎役者は世間の評判がすこぶる気になる。大部屋役者の女形、真舟も同じこと。「役者評判記」が盛り上げられると、いち早く入手する。その劇評で一度高く評価されたが、最新版では技量が足りぬと「白抜き」の低評価。この評者が餅屋の源蔵。源蔵は無類の芝居好き。趣味が高じて評判記を任されている。世間では作者不詳だが、真舟は手を尽くして彼を探り当てる。ここから読みどころ。憤懣やるかたなくけちのひとつでもつけようと、源蔵のもとへ乗り込む。しかし、真舟の恫喝めいた脅しにも動じることなく、評者としての矜持を失わない源蔵。ぶつかり合う二人だが、真舟は源蔵の芸に対する一途な愛着や役者に芸を極めてもらいたいと願

う真摯で誠実な姿勢に次第にほだされる。しかし、この後にもうひとつ気の利いた仕掛けが設けられている。最終部の互いの心持がわかった者同士の本音のやりとりがいかに清々しいことか。

三作目は、藤野恵美の『行きて帰るし物語』。担当編集者と意見が合わず袂を分かった新人作家が、人気作家となって活躍するようになった頃にかつての編集者のアドバイスが今の自分を育ててくれた礎石であったことに気づく物語。

戸惑ったのが第四作目。乗代雄介の『金城氏』(ちなみに金城氏は小説内で出版元の東京創元社勤務)。作家は、前半は編集者と適宜情報交換する。そのときは理知的に、理路整然とした文章で書き進めている。ところが、後半編集者とどういわけか連絡が取れなくなると、冷静さを失う。どうしていいか、途方に暮れる。文体もあたふた。疑問符だらけの文章が続く。はて、編集者とはいったいどんな存在なのか。

編集者もいろいろだ。4人の作家はそれぞれ独自の視点で書き上げているが、いずれにしろ書くという作業が決して作家の一方通行でなく、作家と編集者の間で繰り広げられるきつい戦場であることがよく見えてくる。いい編集者がいて、いい作家が生まれるということか。逆もしかり。

ちなみに、編集工学研究所所長の松岡正剛(1944～2024年)が「千夜千冊1716夜」で『名編集者パーキンズ』およびその映画化(映画名「ベストセラー」)について熱く語っているが、名編集者の条件・資格についても「編集者にとって、自分がどんな言葉にかかわるかということが『黒いダイヤ』としての石炭であり、どんな料理もつくりだすパイヤーベースで…(中略)…言葉の兵器に習熟する必要がある」と述べている。編集者自身は何よりも言葉の錬金術師でなければなら

関本 英太郎

BOOK REVIEW

流用

¥44311

この国は君のもの、そして僕のもの —カリフォルニアからニューヨークまで、セコイアの森からメキシコ湾まで—

→長体 75% (75%) →長体 80% (80%)

『一度読んだら絶対に忘れないアメリカ史の教科書』

(ウディ・ガスリー)

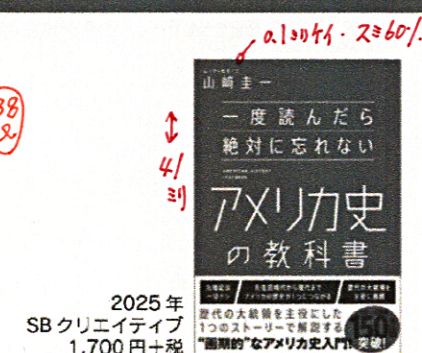
(20a B太ゴ B101) (75%) シリロエ

山崎圭一 著

ボストンで生活していたとき、米国人の友人と歴史の話になり、「日本の高校で学ぶ歴史は日本史、中国史、ヨーロッパ史だ。」と言ったことがある。あなたが極端な意見ではないと思う。高校で習う世界史の主要部分は中国王朝史とヨーロッパ主要国の興亡史であって、たとえば東南アジアの歴史などまづ習わない。

「アメリカ史は？」と尋ねられたので、「アメリカ史はヨーロッパ史の一部として習う」と答えた。実際にアメリカ史といえばコロンブス以後のことであって、先住民の歴史に触れることはまずない。南アメリカもアフリカも、そしてオセアニアも、いずれもヨーロッパ人との接触によって、「歴史化」が始まっているのだが、しかしそれ以前にそこに住んでいた人々にも歴史がある。それに着目しないのは偏った歴史理解である。

著者は元・福岡県立高校の社会科教師であるが、現役であった時分からもう10年以上、YouTubeで自分の授業を公開しているという。知らなかった。しかし公務員でもこうした活動ができる時代になったことは好ましい社会の進化であろう。配信のきっかけは転勤辞令が出たときに、在籍校の生徒たちから、もっと授業を聞きたいとYouTubeでの配信を提案されたことだという。チャンネル名はHistoria Mundi (ラテン語で「世界の歴史」)であり、このためムンディ先生と仇名されている。本書を読んでからそのチャンネルを見たのだが、本当に高校の授業そのものである。派手なあるいは胡散臭い演出はまったくなく、淡々と板書(パワーポイントじゃないよ!)し、正面に(カメラに)向かって語りかけている。これで累積再生回数は1300万回を



超えるというのだから、受け狙いより内容で勝負、の好例だといっていいだろう。そして本書はその授業から書籍化されたものの一つである。同様の書籍としては、『一度読んだら絶対に忘れない世界史の教科書』『一度読んだら絶対に忘れない日本史の教科書』『世界史と地理は同時に学べ!』など多数あり、よく売れているようだ。

本書は石炭時代から始まっている。当たり前だが、大陸の多彩な自然環境に応じた多彩な文化が育まれたことがわかる。ややもするとインディアンとひとまとまりにして語られがちな人たちののだが、多くの民族・多くの文化の集合体なのである。それゆえ移民してきたヨーロッパ人への対立も異なる。やがて植民地の時代、独立戦争を経て、合衆国が誕生する(1776年)のだが、本書の大きな特徴であり魅力であるのは、合衆国成立以後の歴史を大統領で区切り、アメリカ史を読み解くカギは大統領と議会の関係である、とストーリーを明確にしていることである。

合衆国は今年でようやく成立250年という若い国であるが、人類史上最古の民主主義国家だということもできる。とはいえ、自由、平等、人民主権という建

国の理念は皆が共有しているにしても、成立過程が異なり社会・経済構造の異なる多くの地域(州)を一つの国家として包括しようというのだから、並大抵の努力ではとても維持できない。そこで大統領は国民によって選ばれ、国民の委託により強い権限を行使できる。もしその政策が国民にとって不適切なものであれば(銃によってでも)それを停止させることは可能であるのだが、現実的には最長で二期八年という時間が政策の切り替えの主要素となっている。

現在の米国大統領が露骨に示している自国本位(経済利権)、領土拡張欲、人種・民族差別の容認などは、今になって突如出てきた思想ではなく、本書が示す歴代の大統領の政治姿勢、政策などを逐一見ていけば、過去にもあったことがよくわかる。しかし行き過ぎれば、あるいは国民の支持を失えば新しく登場した大統領が、新しい政策を進めるということだ。不安定なようだが、一度決めたら国家が破綻するまで既定方針を貫くという国家よりは健全なのではないだろうか。歴代大統領の業績評価としては、トップ3がリンカーン、ワシントン、F・ルーズベルトというのはどの分析でもほぼ一致している。彼らは合衆国という国家を破綻から救った(ワシントンの場合は国家の成立)という点で共通しているのだ。

本書を読めば「絶対に忘れない」と断言することは、このところ物覚えの悪い書評子にはできないが、アメリカ史を理解し、現在のアメリカを考察するには非常に有益な著作だと考える。

アキ

福家 伸夫
(帝京大学ちば総合医療センター)